

南の島の祭礼

茶楠サリ

細かい彫刻が施された見事な割れ門へと上る石段。その石段はバリ島のヒンズー寺院内へ参拝者を誘う細い通路だ。正装に身を包み、頭の上にガボガンと呼ばれる果物やお菓子を盛った供物を載せ寺院内に入ってゆく現地の人々。その姿はまるで絵の中から出てきたように美しい。そしてバリの人々が寺院内に入るのを妨げるかのように階段の途中に立ち尽くし、背伸びしながら中の様子を伺う幾人ものツーリスト。ほとんどが短パンにTシャツの軽装、大いに日焼けした風貌からサーフィンと夜のクラブライフを楽しむためにバリ島に来ていると思しき欧米人だ。(注釈…ヒンズー寺院内へ入るには服装の規定があります。)

ここは1970代頃からサーフィンのスポットとして、また不夜城の街として観光客の奔放な欲望を満たしてきたバリ島のリゾートエリア、クタ&レギエアン地区。国の政策により外資を駆使して計画的に構築された高級リゾート地のような作爲的なリゾート地ではなく(もつとも近年は高級感溢れるホテルも進出しているが)、もつと庶民的で生命力があつて、犯罪もありそしてディーブな恋愛沙汰もある、バリの人々と外国人がいろいろな人間模様を描く時に物語よりドラマチックな現実が生まれては消えるリゾート地だ。

まだ生々しく記憶に残っているJAL羽田発大阪行きの際落事故から約一週間後、1985年のお盆を過ぎた頃、生まれて始めての海外旅行でバリ島へ発った。今のようになネットやガイドブックで手軽に現地情報を手でできる時代ではなかったため、航空券だけ手配した個人旅行は一か八かの賭け、出たところ勝負の冒険のようでもあつた。敢えて事前に知識やデータを収集するのは止めて、固定観念がまるで無い状態で憧れの地があるがままに感じたいと思つた。

とても国際便を受け入れるエアポートとは思えない田舎空港の様相を呈したバリ島のン・グラライ空港に到着し、手荷物を持ってタラップを降りパスポートコントロールの建物までムツとした熱帯の空気を肌で感じながら歩いた。

すっかり整備された現在のン・グラライ空港から消えてしまった、薄れてしまったもののひとつがこのムワツと全身に纏わりついてくるような独特の匂いかもしれない。

その匂いの源はバリ人が好む丁子入りの煙草グダングラムの甘い香り、空港内に供えられた細長い線香、夜に尚香りを損なわない熱帯の花々、例えばブルメリアなどの匂い、そして空港建物を出るとすぐ目に付いた露天商が盛大な煙りとともに焼いているサテ（インドネシア風肉の串焼き）とサテに添えるピーナツソースの甘辛い匂い。生活を感じる様々な匂い香りが空港内まで届いていた。それくらい気密性のない大らかな国際空港に降り立ち、空気の匂いだけで頭の芯がクラクラと酩酊状態に陥るのを感じた。

ツーリストインフォメーションで宿を探してもらった。今ならどんな安価な宿、バリ風に言くとロスメン（簡易宿）であつてもたいてい日本からネット予約できるが、当時事前予約可能なのはそれなりの星を数えるホテルくらいだった。限られた資金で如何にロングステイを満喫するか目論む旅人にとって、最低一泊50ドルのホテルは贅沢の極みだ。そこにお金はかけたくない。紹介されたバンガロースタイルの宿は空港からもっとも近いリゾート地クタにあつた。通された部屋はごく簡素で、部屋の中央にバンブー製のキングサイズベッドと小さなサイドテーブルがあり、奥に簡単なシャワールーム、室内の明かりは天井近くに吊るされた裸電球のみだった。薄暗い部屋に目が慣れてくると二階のこの部屋には入り口と反対側にバンガローの庭に向かつてバルコニーが開けていることが分かった。この宿でもっとも気の利いたスペースがこのバルコニーでそこにはかなりどっしりした造りのバンブーのテーブルと椅子の三点セットが置かれていた。

スニーカーを脱ぎ、靴下を脱いで裸足で暗闇の庭に面したバルコニーに立ち、闇の中から香ってくる庭の花々の気配を感じていると、一陣の風に乗ってどこからかガムランの音色が聞こえてきた。生まれて初めて聞く生のガムランの音。暫くその昔に耳を傾けていたがどうしてもじっとして居られなくて右も左も分からない町に繰り出した。音を頼りにクラブやディスコなどで賑わう大通りから外れ小道に入ると、そこはまるで別世界のように着飾った現地の人々で埋め尽くされていた。

さつきまで歩いてきた通りの喧騒、肌を露出したリゾートファッションに身を包み、飲み語り締る異邦人が集うカフェからひとつ逸れた道の奥ではまるで違う今が進行していた。このギャップに面喰らった。どちらのパワーも強く、そしてその二つはまるで異なる目的をこの夜に託している。そのどちらにも属さないわたしは宙ぶらりんな

心と身体を鼓舞するようにガムランの音だけを頼りに細い道を進んだ。

幾人かのツーリストが階段の途中にたむろして寺院内を覗き見るのに習い、思いきり背伸びして隙間から中を覗くとそこには今まで見たことのない光景が広がっていた。

数え切れないバリの男性が仰向けに倒れ、各々何かを口走ったり、痙攣を起こして引き攣る身体のまま地面でのたうち回っていた。男性は皆白いシャツに白い腰布という服装で、苦しそうな、あるいは恍惚とした表情を浮かべ這いつくばっている。神迎えの儀式でその場の気に同化し神に魅入れトランス状態にある人々、そしてそんな男性たちを縫うように水（聖水）を持って優雅な手つきで聖水をのたうつ男性たちにかけて歩く僧侶。聖水を受け少し経つと正気を取り戻し、まるで何事もなかったように起き上がりすたすたと歩いてその場を立ち去る男たち。一体何が起きているのか。頭の中が混乱した。

ほんの二時間ほど前に生まれて初めての海外旅行で異国の空港に降り立ち、宿を決め、部屋に荷物を下ろした。その事実だけでもわたしにとってすごいことなのに、目の前で起こっていることは俄かに現実とは思えなかった。夢でも見ているのではないだろうかと言ふ心と同時に、信じがたいほど冷静に意識の深いところでこのトランスを受け入れているもうひとりの自分がいた。

「そう、この地の人々は目に見えない大いなる存在に対して完全に自身を預け、任せ、空け渡す術を知っている。それは綿々の続く命の循環の中で育まれた揺ぎ無い魂の信頼から来るもの」

そんな言葉が内なる声として届けられるのを感じた。

人が何かと繋がっているという確信を得た時如何に強くなれるか、疑いのない命の謳歌、躍動、今この瞬間にこの場と完全にひとつに成れる潔さ、その後幾度となくこの地を訪れこの地に長らく滞在した際も、変わらずわたしが羨望し求めていたものはその揺らぎない確信とも言える生の安定感、安心感のようなものだ。

バリの人々にとって当たり前の感覚なのだが、この疑いのない抛り所のようなもの言い換えるなら魂の安息所のような場所、どうすればそこへその境地へ辿り着けるのか答えを求め続けた。

結局答えはいまだに見つからない。あの真夏の夜に出遭った南の島の祭礼は今も意識のそこそこに留まってわたしに問いかけている気がする。

あなたは何処から来て何処へ行こうとしているのかと。